



ゴットフリート・ケラーの『マルティン・ザーランダー』について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 谷口, 栄一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00017321">https://doi.org/10.24729/00017321</a>

# ゴットフリート・ケラーの 『マルティン・ザーランダー』について

谷 口 栄 一

## 0. はじめに

ゴットフリート・ケラーの長篇小説といえば、誰もが『緑のハインリヒ』（1855年、改作1880年）を思い浮かべる。実際、短篇小説の傑作が多いケラーが「スイスのゲーテ」と呼ばれるのは、この『緑のハインリヒ』がゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』と並ぶ典型的な教養小説と解されているためであろう。併しケラーは晩年にもう1つの長篇小説『マルティン・ザーランダー』（1886年）を完成しており、こちらのほうは教養小説ではなく、時代の社会的現実の全体像を描く社会小説である。近年になって注目されることがいくらか増えつつあるものの、同時代人の間でも、研究者の間でも概してあまり評価が高くなかった。そもそもケラー自身がこれを失敗作と考えていたようである。<sup>1</sup>

## 1. 鉄道・駅

この小説は駅に始まり、駅に終わる。小説の冒頭は、学校の同級生であった詐欺師ヴォールヴェントに全財産をむしり取られてブラジルに渡った主人公マルティン・ザーランダーが、7年ぶりに故郷ミュンスターブルクの駅に降り立った場面で始まっている。ミュンスターブルクはスイスの架空の都市名であるが、ツューリヒがモデルになっている。「数年前に自分が旅立っていった駅から出てきたのではないことに、そしてそればかりか以前の場所には1つのはるかに大きな建物が建っていることに、彼は気づいたのである。」<sup>2</sup> スイスで最も早く鉄道が敷設された都市といえばバーゼルであるが、これは1845年にフランスの鉄道（アルザス鉄道）がバーゼル・フランス駅まで乗り入れることになったものであり、スイス国内の鉄道として最初に建設されたのは、1847年開業のツューリヒとバーデンを結ぶ23.3kmの路線で

---

ケラーの作品からの引用はすべてGottfried Keller: Sämtliche Werke in 2 Bänden. München (Droemer) 1954. を使用し、以下の註釈においてはSWと表記している。また『マルティン・ザーランダー』の日本語訳に際しては、『ケラー作品集第4巻（佐野利勝・麥倉達生訳）』（松籟社）の訳文を必要に応じて参照している。

<sup>1</sup> Vgl. Eva Graef : Martin Salander. Politik und Poesie in Gottfried Kellers Gründerzeitroman. Würzburg (Königshausen & Neumann) 1992, S.1f; Thomas Binder : Martin Salander. Zwischen Experimentierfreude und Pflichtgefühl. In: Walter Morgenthaler (Hrsg.) : Interpretationen Gottfried Keller. Romane und Erzählungen. Stuttgart (Reclam) 2007, S.154.

<sup>2</sup> SW Bd.2, S.472.

あった。<sup>3</sup> この路線の開業時に建築された初代のツューリヒ駅（現在のツューリヒ中央駅）の駅舎は、スイス国内の鉄道網が急速に整備され、利用者が着実に増えていくにつれて手狭となり、1871年には近代建築の粋を尽くして建てられた新しい駅舎に移転している。先行研究によると、マルティン・ザーランダーが1度目のブラジルからミュンスターブルクに帰還したのは1868年と推測されており、細かいところでは小説の年代は現実の年代とは必ずしも一致しないようであるが<sup>4</sup>、いずれにしても、新しいツューリヒ駅は、近代都市の顔として、この時代の経済発展と近代化を象徴するものであり、そのことが小説のミュンスターブルク駅とその周辺の描写において表現されている。

マルティン・ザーランダーの2人の娘ゼッティとネッティの結婚式においても、駅と鉄道が用いられる。「時代精神にふさわしいものとして、交通手段に鉄道が選ばれた。（中略）貸切列車が結婚式の行われることになっている村まで一行を運ぶ。それはこの都市（＝ミュンスターブルク）とリンデンベルクとウンターラウプとのだいたい中間に位置しており、よい料亭のある立派な村である。」<sup>5</sup>マルティンが新郎たち（ユーリアーンとイージドーア）とだけ話し合っただけで決めた当初の計画では、馬車を全く使わずに、ミュンスターブルク駅で招待客たちを新郎新婦と両親が出迎えて、駅の大食堂で朝食会を催すことになっていたが、妻と娘たちの反対によって、朝食会の場所はホテルに変更となっている。さて結婚式当日ミュンスターブルク駅を貸切列車で出発し、「一行は目的地に着いた。駅前広場では、列車が停車して乗客が降りてくるまでの間、兵役を終えたベテランの8人の楽師たちが心地よい行進曲を演奏していた。待合室では、集まっていたこの土地の招待客たちが到着した者たちと挨拶を交わし、一緒に教会まで歩いて行くために整列をしたのであった。」<sup>6</sup>産業革命期の近代技術の象徴たる鉄道の開通によって、結婚式は小旅行を兼ねたものとなり、客の招待の範囲も広がっている。馬車という閉鎖的で貴族的な乗り物ではなく、大勢の招待客が一本の列車で一緒に運ばれていき、駅からは整列して一緒に歩くというのが、ザーランダーの理想に照らすならば進歩主義的で民主主義的な「時代精神」なのである。

小説の最終章は次のように結ばれている。「ある晩誠実な男であるマーニ・ヴィークハルトがやってきて、駅でヴォールヴェントが婦人たちを連れ、長持やスーツケースを携え、邪悪な目をして姿を現し、超特急列車に乗って去って行くのを見たと話したのであった。」<sup>7</sup>この時代にあつて鉄道の駅は文字通り世界へ通じる都市の玄関口であり、都市に入ってくる者も、都市

---

<sup>3</sup> Vgl. Silvia und Dietmar Beckmann : Schweiz. Die Eisenbahngeschichte. Das große Album. München (GeraMond) 2012, S. 14-17.

<sup>4</sup> Vgl. Graef : a.a.O, S.50.

<sup>5</sup> SW Bd.2, S.573.

<sup>6</sup> SW Bd.2, S.576.

<sup>7</sup> SW Bd.2, S.694.

から出ていく者も、すべて駅を経由するのであった。常時駅の近くをぶらついていて、しかも人間好きのヴィークハルトは、比類なく正確な情報に通じていたのである。「僕は毎日駅でコーヒーを飲んで、誰が出発し誰が到着するかを見ているんだ。」<sup>8</sup> 駅と鉄道はこの作品において、近代技術や都市の経済力の象徴といった時代背景の描写にとどまらず、主人公の進歩主義的信条を反映するものでもあり、何よりもまず物語の扉とでも呼ぶべき重要な役割をはたしていると言わなければならない。

## 2. 森林伐採

新しくなったのは駅の建物だけではなかった。郊外ツァイジヒ地区から高台クロイツハルデの自宅へと向かう道も周辺の風景も7年前とはまるで違ったものとなっていたのである。かつて広がっていた牧場や果樹園も、「緑陰の中を心地よく丘の上へと通じていた小道」<sup>9</sup>も跡形もなく消え、そのあたりには隙間なくびっしりと建物が並んでいた。そしてマルティン・ザーランダーがブラジルにいた間、妻マリーがクロイツハルデで営んでいた飲食店は、隣接地に大木の林が広がり、それがもたらす緑陰は店にとっての資本であったはずだが、たくさんの美しい木々は姿を消し、わずか1本のプラタナスの木を残すばかりとなっていた。開発や投機の波が押し寄せ、林とその周辺の土地は道路や建設用地として地主たちによって高値で売り払われていたのである。マリーの店の客足はめっきり遠のいてしまい、最後の客は「1本の木が立っている限りは来ます」<sup>10</sup>と言う。マルティンが帰宅した夜には、母子は食べる物がまったくない状況に陥っていた。

森林伐採による景観破壊はこの場面だけにとどまらず、小説の後半の第13章のラウテンシュピールにおいても重要な問題として扱われている。ザーランダー夫妻はイージドーア・ヴァイデリヒと結婚した娘ゼッティのことが心配になってラウテンシュピールの彼女のもとを訪れる。マルティンは娘の家に着いたときから屋敷を取り囲んでいるブナの林を賞賛する。ブナの林は鬱蒼とした大きな森に続いている。併し娘婿の公証人イージドーアは、「ええ、そうですね、なかなか気持ちがいいです。ただこの林はもはやあまり長くは今のままで立っていないでしょう。あの森はウンターラウプ町の所有地で、二、三年経てば伐採されることになっています。材木商たちがもうそれを狙っています。その時には、私も私たちのブナの木々を売り払うことになるでしょう。それは一気に進められて、結構なお金になりますよ！」と言う。驚いたマルティンが「あなたは正気ですか？あなたたちのブナの林だけが、伐採された山から落ちてくるおびただしい泥や塵から、家と庭を、牧場ともども護ってくれるわけでしょうに！」と大声を上げたのに対し、イージドーアは「そんなことは私にはどうだっていいことです！そんな

---

<sup>8</sup> SW Bd.2, S.477.

<sup>9</sup> SW Bd.2, S.472.

<sup>10</sup> SW Bd.2, S.488.

れば引っ越して、一切合財を売り払うまでです」<sup>11</sup> と言い放つのである。イージドーアの景観や樹木に対する無関心は、この直後に交わされるマリー・ザーランダーならびに妻ゼッティとの会話にも結びつく。マリーはラウテンシュピールという地名の由来について尋ねるが、イージドーアはそれを知らないばかりか、由来や歴史を知りたいという気持ちすら持たないのである。ゼッティが地域で広く語り継がれてきた伝説を紹介しても、イージドーアは「一度も聞いたことがないね。というか、僕はそんなことに注意を払ってこなかったのだ。だからといって、別に残念でもないさ」<sup>12</sup> と小馬鹿にし、金儲けに直接結び付かない歴史や伝説の知識には意義を見いだせないのである。

ケラーで森林伐採といえば、『ゼルトヴィーラの人々 第2部』に収められた短篇小说『失われた笑い』を思い出さずにはおれない。その主人公ユクンドゥスは結婚と同時に軍人の道を断念し、ゼルトヴィーラとその周辺の豊富な木材を外国に輸出する商売を起こしていた。ゼルトヴィーラの人々は古来森林を「快適な生活の源泉」として、また市民の誇りとして大切に守ってきたのであったが、「ところがどういう隙間からか誘惑と物欲とが入りこんできてしまい、人の目には見えないうちに死神がすでに広大な森の殿堂の中を歩き回り、また森の縁沿いに忍び歩いては、骨だけの指で滑らかな幹を叩いていたのである。」<sup>13</sup> 森林開発の波は他国の商人たちを通してもたらされたものであったが、ゼルトヴィーラの人々にとっては地元出身の信頼できる仲介業者の誕生はありがたく、ユクンドゥスの商売は成功を収めていたのである。併し当然のことながら森林破壊は急速に進んでゆく。「斧は結構若い森にまで入ってくるようになり、お金を流入させるためにもっともらしい目的が次々とでっち上げられるようになり、その代わりに山の斜面はますます禿げてゆく一方だった。」<sup>14</sup> 子供の頃から森に親しみ、森を愛していたユクンドゥスは、自分がこうした商売で利益を上げていることを恥ずかしく思わずにはおれなかった。材木商をやめ、業種を急激に転換することになる。材木に代わる建築資材を商うようになる。併し他の業者による材木の輸出は止まらない。ユクンドゥスは雑木林が次々と伐採されてゆく中で、最後まで残っている1本のオークの美しい巨木とそれが立っている周囲の地面だけを自ら買い取って、この巨木を救うのであるが、商売替えは成功せず、資金が底をついて廃業を余儀なくされた。オークの巨樹も土地とともに売り払うしかなかったのである。<sup>15</sup> マルティン・ザーランダーと同様に善良な商人であったユクンドゥスを責めることはできない。材木商は本来必ずしも自然環境を破壊する職業ではないはずだが、この時代の急速

---

<sup>11</sup> SW Bd.2, S.609.

<sup>12</sup> SW Bd.2, S.610.

<sup>13</sup> SW Bd.1, S.973f.

<sup>14</sup> SW Bd.1, S.974.

<sup>15</sup> Vgl. SW Bd.1, S.976-979; Rudolf von Passavant: Zeitdarstellung und Zeitkritik in Gottfried Kellers >Martin Salander<. Bern (Francke) 1978, S.40-42.

な都市化や経済発展、有価物に対する投機行為の蔓延の中で、結果的に森林破壊に手を貸してしまうのである。

良心の呵責ゆえに時流に逆らおうとして経営破綻するユクンドゥスは、はびこる拝金主義を具現するイージドーアとは対照的な存在である。産業革命と経済発展によってもたらされた自然破壊はすでに社会問題として認識されつつあった。『マルティン・ザーランダー』においては、ザーランダー家の人々とイージドーアの会話の中で、郷土の歴史に対する関心と意図的に結びつけることで、単に自然環境の問題としてだけではなく、人間の心の荒廃の象徴として、すなわち教養と文化、普遍的人間愛の問題として、森林伐採を告発しているのである。

### 3. 教育・教養

森林伐採と教養との結びつきを確認したが、小説『マルティン・ザーランダー』のテーマとして、教育や教養の問題があることに注目する必要がある。マルティンは一般に理想主義者と解釈されており<sup>16</sup>、出世主義者や拝金主義者が跳梁跋扈し、詐欺や横領が頻発する時代にあつて、郷土愛と利他主義的な理想に基づいて、社会的責任を強く自覚し、築き上げた財産に見合う形で、共同体の政治に参加している。それを市民としての義務と考えている善良な人物として描かれていることは確かである。とはいうものの、時代の道徳的腐敗や精神の荒廃に対して、マルティンは全く責任がないと断言できるのであろうか。

主人公マルティン・ザーランダーは農村の出身で、師範学校を卒業後、故郷の村で中学校の教師となっていたが、両親が亡くなり、マリーと結婚したあと、田舎暮らしを窮屈に感じるようになって、都会ミュンスターブルクに出てきて、実業家として成功をおさめたのである。故郷と教職を捨てた男という点では、詐欺師ヴォールヴェントとほとんど異ならないと言えるのではないだろうか。産業革命と資本主義の発達の中で、よく言えば進歩主義者として、悪く言えば時流に流されて、農業を捨てて田舎教師になり、さらには田舎を捨てて都会に出て、実業家を志す。第2章で自らの生き立ちをヴィークハルトに語る場面があるが、「尋常の熱心さ」<sup>17</sup> という表現は用いられているものの、教育者としての真の情熱を読み取ることは難しい。「義務感を持って学校を管理した」のであり、「私に感謝するであろう農民たちに会えると期待して、後の日々のことを楽しみにしていた」のである。併し教え子たちに再会する機会はなく、「子供たちはさっさと教師の目の前から姿を消して、どこかそこいらの事務室の中にもぐりこんでしまった」<sup>18</sup> のであり、そのことがマルティンには不満だったようで、教職を続ける意欲を失ってしまうのである。近代の学校教育制度は産業革命とともに発達してきたものであり、特にこの時代に中等教育を受けた者が農村にとどまらないというのは宿命的なものである。い

---

<sup>16</sup> Vgl. Graef : a.a.O, S.65f.

<sup>17</sup> SW Bd.2, S.480.

<sup>18</sup> SW Bd.2, S.480.

ずれにしても教職に就く者の考えにしては近視眼的であり、少なくとも教師の鏡のような人物とは言えないであろう。

さらに、マルティンは二度目のブラジル渡航を前にして、妻からもう一度教職に復帰するように説得される。「あの子どもたちはいったい、生きていけるために、どうしても金持ちにならないといけないというの？」<sup>19</sup> と問いかけるマリーに対し、マルティンは「かつての教師としての良心」に痛みを覚えながらも、次のように答える。「それは正しく、また分別のある考え方だ。だがそれは僕にはできない。まず第一に僕は、いまずぐ教壇に立つために必要な訓練も、また知識の保持と増強も、まだほとんど持っていないし、それに補習課程を受講するにはさすがに年を取り過ぎているからだ。それに反して、まさにその精神によって僕は駆り立てられてきたのだが、世の中で自由に活動しながら足をふんまえて立つためには、まだ十分に若いと感じているんだよ。」<sup>20</sup> 教育に関して高邁な理想を熱く語るマルティンであるが、教師の仕事に誇りも未練も感じてはいない。実業家として財産を築き、経済力を基盤にした名望家となって社会を直接的に動かしたいと望んでいる。ヴォールヴェントやヴァイデリヒ家の人々と共通点があることは明確である。マルティン・ザーランダーは古い価値観や正義感を堅持しつつも、結局のところは時流に流されている人間にほかならない。このアンバランスこそがまさに彼の危うさの本質なのである。

背任横領をはたらくことになる双子の兄弟イージドーアとユーリアーンの母親アマーリエ・ヴァイデリヒは、もともとは農民であるが、いまでは農業は夫にまかせ、ミュンスターブルクの郊外でクリーニング店を営んでいる。彼女自身は無教養であるが、いわゆる教育ママで、息子の出世だけを楽しみにしていた。「私たちはここでは庶民ではありません。みんな出世する権利を等しく持つ人々なのです」<sup>21</sup> と言い、息子たちには自分のことを「お母さん」ではなく「ママ」と呼ばせており、それが下層階級でないことを意味すると信じている。農業を営む夫ヤーコプを見下しており、彼が息子たちに人参を洗うのを手伝わせようとすると、それを阻止する。下層階級ではないとうそぶくものの、双子がマリーの経営するレストランに中庭から侵入してきた場面から判断する限り、まともな躰ができていようには到底思えない。双子がギュムナージウムの生徒だった頃、アマーリエは、ザーランダー夫妻に向かって次のように語っている。「おかげさまで、私たちは順調にいます！併し私たちが稼ぐ全てのものを、私たちは二人の息子とその将来の日々のために捧げます。息子たちは埋め合わせをしてくれて、世間の評判になってくれることと期待していますわ。勉強においても、必要な全てのことにおいても、何一つ不足がないようにしているのですからね。」<sup>22</sup> ただアマーリエ・ヴァイ

---

<sup>19</sup> SW Bd.2, S.513.

<sup>20</sup> SW Bd.2, S.513.

<sup>21</sup> SW Bd.2, S.475.

<sup>22</sup> SW Bd.2, S.531.

デリヒが純粋に教養や学問を尊重していたわけではない。イージドーア自身が「『大学教授も今ではとても稼ぎがよいから、あなたたちが望むのなら、大学教授になってもいいわ』とママが言っています」<sup>23</sup> と言っている。このように育てられたイージドーアとユーリアーンは、大学入学資格を授与するギュムナージウムの途中で勉強が嫌になり、結局のところ二人とも大学に進学することはなかった。「やり始めた勉学をやり遂げる持久力が欠けていた」<sup>24</sup> のである。二人とも公証人事務所で働くことになり、父親ヤーコプ・ヴァイデリヒはこうした進路にいくらかの疑問を感じたが、母親は大いに満足していた。「子供たちはわたしたちより賢いわ。あの子たちはもうどの方向へ向かっていかなければならないかを知ってるのよ！あの子たちは与えられる仕事は何だって出来るじゃないの？なぜあの子たちが、他の馬鹿どものように、若い頭を悩まさないといけないのよ」<sup>25</sup> と言う。アマリエは学問や教養を金儲けの手段としか考えていないのであり、ヤーコプもまた本質的に異なる価値観を持っているわけではなかったのである。職に就いたイージドーアとユーリアーンは、社会における義務や責任を自覚することもなく、ひたすら社会的地位と財産を求め続けるばかりで、挙げ句の果てに犯罪者にまで成り下がってしまう。彼らは当時のエリート教育機関において恵まれた教育を受けたはずであるが、そうした教育制度も人間の墮落を抑止することができないのである。

再びマルティン・ザーランダーに話を戻すことにしよう。マルティンの教育観がまとまった形で披露されるのは、州議会議員となった彼が妻マリーに理想の教育を語る第13章である。「彼の大好きな領域は国民教育であった。それは彼にしてみれば真の故郷を意味し、彼はこの故郷で、学校からのかつての離脱の埋め合わせをしなければならないと考えていた」<sup>26</sup> のである。マルティンは「都市であれ田舎であれ、われわれの青少年たちの誰一人として、二十歳に達する以前に国家による教育から卒業させられたいしなくなるのを、僕はまだ体験できると期待している」<sup>27</sup> と切り出す。初等教育を終えた後、二十歳までの義務教育で学ぶべきことを列挙する。数学の諸科目、文章表現、動物体と保健の知識、地誌学と歴史、体育と軍事訓練、唱歌と音楽教育、公民科、憲法の知識、工作などを学びに学び、鍛錬を重ねるべきだというのである。あまりにも浮世離れした構想に対し、マリーは耐えきれず、「いったい誰が貧しい農民たちの畑仕事を手伝えよいのでしょうか？誰がその若者たちを養えばよいのでしょうか？それともあなた方は、若者たちが二十歳になるまで彼らにお給料を支払おうというのですか？そして二十歳になれば彼らは何でも理解できるが、机と椅子をこしらえることを除いて、働くこと

---

<sup>23</sup> SW Bd.2, S.530.

<sup>24</sup> SW Bd.2, S.534.

<sup>25</sup> SW Bd.2, S.534.

<sup>26</sup> SW Bd.2, S.601.

<sup>27</sup> SW Bd.2, S.601.



だけは理解しない、そんなことを望んでいらっしゃるのですか？」<sup>28</sup>と反論する。こうした市民生活の現実との乖離は、教壇に立っていた若き日の彼の先述のような意識とも直結するものであった。併しながらこの現実との乖離をマルティン自身は自覚できていない。

マルティン・ザーランダーは自分の子供たちに対する教育についてはどのような考えを持っていたのだろうか。娘たちがヴァイデリヒ家の双子の兄弟と婚約した後、いまだに結婚に難色を示すマリーに対して、マルティンは「君には少々貴族主義的なところがあるね。どうして君があの人たちにそんなに我慢ができないのか、僕にはまったくわからないんだ。(中略)双子たちはそのうちに二人のたくましい男になって成功するだろう。一方僕たちのアルノルトは酔狂な考えからひょっとすると部屋にばかり引っ込んでつまらない者になるかもしれないよ」<sup>29</sup>と言っている。息子のアルノルトはイギリスの大学に留学し、法学と歴史学を学び、教養を磨いている。父親の事業を手伝いながら、在野の学者として学問を続けたいと望む。事業においても政治においても堅実さと慎重さを好み、良きにつけ悪しきにつけ、野心には欠けている。機知に富んでおり、父親マルティンよりも聡明な若者として描かれているが、マルティンは彼のことを理論一点張りの頭でっかちの傾向があると見ており、そのことをさかんに心配している。併しながら先述のような市民生活の現実と乖離したマルティンの教育観に照らすならば、こうした心配は矛盾しており、少なからず滑稽な印象を与えるものとなっている。むしろ幼少の日々を長く父親と離れて暮らさざるを得なかったアルノルトは、母親マリーの影響を強く受けており、母親譲りの鋭い洞察力と批判的思考力を発揮しているように思われるのである。小説の冒頭の場面からして、マルティンが進歩の魅力の虜になっているのに対し、アルノルトは決まった場所から動かない。マルティンは感激しやすく、酒が入ると軽率な言葉を口にするのに対し、アルノルトは酒が入っても冷静で慎重である。父親が何かにつけ十分な熟慮を経ないままに実行に移そうとするのに対し、息子はまず距離を置いて懐疑的、批判的に考察しようとするのである。<sup>30</sup>新しい社会的現実への適応力が乏しいのは、むしろ父親マルティンのほうなのである。

二人の娘ゼッティとネッティに対する教育はどうであろうか。就職やその準備をさせたり、下宿生活をさせたりすることには、マルティンは断固として反対してきたのであった。マルティンは進歩主義者を自認していたにもかかわらず、経済的に困窮していない家の女性は外で働くべきではなく、家庭の中で自由に暮らすべきだという考えを堅持していたのである。ゼッティとネッティがヴァイデリヒ家の双子と婚約した時、正反対の考えを持っていた妻マリーが嘆いたように、姉妹は結果として世間知らずのままに25～26歳まで育ち、年齢相応の思慮分別がなく、ヴァイデリヒ家の双子とその母親との下心を見抜くことができないまま、不幸な結

---

<sup>28</sup> SW Bd.2, S.602.

<sup>29</sup> SW Bd.2, S.572f.

<sup>30</sup> Vgl. Graef : a.a.O, S.93-96.

婚へと突き進んでしまうのである。双子にとって、結婚は社会的地位向上のための手段なのであり、結婚相手は商品なのであった。夫を諫めるところか、自分自身を守ることすらできない女性を生み出してしまふマルティンの家庭教育は、社会悪や社会の腐敗を助長することにつながってしまうのである。

『マルティン・ザーランダー』において、教育への問いが1つの大きなテーマとなっていることを見落としてはならない。第18章のイーゾドーアとユーリアーンの裁判において、ユーリアーンの弁護人は学校教育こそが犯罪の源になっているとあって、教育制度を手厳しく非難する。「減刑あるいは無罪主張の根拠を模索しながら、彼は公立学校の授業、国民教育の嘆かわしい欠如に論及し、あらゆる不幸はそこに起因すると考えられる、と述べた。」さらに「本件においては、前途有望な青年たちが学校へ、しかも高度な教育機関へ送られた。これらの学校の性質をこれ以上詳細に検討するつもりはない。ただ、その成果が上がりなかつたという明白な事実だけで充分だ」<sup>31</sup>と続けるのである。立身出世主義の温床となり、官僚の腐敗につながっているというのである。この教育制度批判は、裁判官によって即座に退けられてしまうが、それにもかかわらず、決して無視できる言葉ではなく、余韻となって作品の最後まで響きつづける。結局のところ、田舎の初等中等教育も、ギュムナージウムのエリート教育も、マルティン・ザーランダーの理想主義的教育観も、時代を支配する拝金主義と道徳的退廃を阻むことはできないのである。

#### 4. 拝金主義の克服は可能か

金融詐欺や背任横領といった出世主義者たちの経済犯罪が多発し、投機目的の開発による森林破壊が横行するミュンスターブルクの拝金主義と道徳的墮落を克服することは、社会として可能なのだろうか。

こうした拝金主義はいわば時代の病である。『マルティン・ザーランダー』はもともと『より高く(Excelsior)』というタイトルの小説として構想されていた<sup>32</sup>ものであり、この皮肉のこもったラテン語のタイトルは当時の社会に蔓延していた出世主義と拝金主義を言い表したものと考えられる。マルティン・ザーランダーとマリー・ザーランダーも含め、作品の登場人物の大半は、田舎から都会に出てきた人々とその子供たちである。まぎれもなく進歩主義なのであるが、何を求めて都会に出てくるかといえば、それは社会的地位であり、金であろう。その限りにおいて、彼らはそもそも出世主義や拝金主義から自由ではありえないのである。進歩的なはずの学校教育も制度改革が裏目に出て、田舎でも都会でも、庶民の上昇志向をかなえるための装置と化してしまい、時代の病に対してはもはや無力であることは、前章までで確認したとこ

<sup>31</sup> SW Bd.2, S.672f.

<sup>32</sup> Vgl. Ursula Amrein(Hg.): Gottfried Keller – Handbuch. Leben – Werk – Wirkung. Stuttgart (Metzler) 2016, S.136; Thomas Binder : a.a.O., S.156.

ろである。

#### 4-1 伝統的価値・地域共同体

時代病に対して抵抗力があるように思われるのはマリーである。聖母マリアの名を持つ「守ってくれる女」<sup>33</sup>として描かれている。ヴォールヴェントの詐欺が3度目以降も繰り返される可能性があることやヴァイデリヒの双子の空虚さを即座に見抜く洞察力を持ち、揺らぐことのない道徳的価値判断に照らして、時流や情に流されやすいマルティンに警告を続ける。悪の世界を回避するようという妻の忠告をマルティンは無視するのであるが、それにもかかわらず、マリーの存在意義は決して小さくない。どちらもお人好しである、州議会議員の前任者であった実業家クラインペーター氏とマルティン・ザーランダーの違いはどこにあるだろうか。綿織物工場の事実上の経営を任された息子たちが乱脈経営を繰り返すのであるが、虚栄心が強く強欲なクラインペーター夫人もこれに荷担し、クラインペーター氏に公金の流用を迫る。会社は倒産し、クラインペーター氏は州議会議員を失職し、完全な破滅に至ってしまうのに対し、マルティン・ザーランダーの人生は挫折のままでは終わっていないのである。両者の大きな違いは、夫人とその夫人の影響を強く受けた息子たちである。マリーの警告はマルティンには受け入れられないものの、彼女自身が伝統的価値としての道徳をかたくに守り続け、また息子を慎重な判断のできる青年に育てることで、ザーランダー一家が悲劇的な破局に至ることを阻止できていることは間違いない。ヴォールヴェントはマリーを「刃のように恐れていた」<sup>34</sup>のである。とはいうものの、マリーの道徳心や洞察力が時代の風潮を変える力があるようには描かれていない。彼女は女性の地位向上を声高に叫ぶ女ではなく、社会進出をもくろむわけでもない。良くも悪くも謙虚であり、日々の家庭生活を守ることがすべてであって、遠い将来への展望を必要としないのである。ザーランダーのような進歩主義者の遠大な構想を相対化してしまう存在である。<sup>35</sup> 結局のところ、古い道徳観念を拠り所とするだけのマリーは、進歩主義の帰結としての拝金主義の破壊力と闘う力を持たないのである。

社会の中にこうした悪に抵抗する自浄作用は存在しないのだろうか。食料が底をついた日の晩にマリーが子供たちに語り聞かせた山の小人たちのメールヒェンをここで想起しておきたい。メールヒェンに描かれているのは、古い理想を守り、継承してゆく良き隣人共同体である<sup>36</sup>。併しながら、都市への急激な人口集中が進む移動と流動の時代にあって、古き良き隣人社会は失われてしまっている。詐欺師も駅から汽車に乗れば、その日のうちに他の都市や外国に行ってしまう時代である。マリーは地域共同体に期待したいのだろうが、メールヒェンの

---

<sup>33</sup> Thomas Binder, a.a.O., S.154.

<sup>34</sup> SW Bd.2, S.680.

<sup>35</sup> Vgl. Graef: a.a.O.,S. 92.

<sup>36</sup> Vgl. SW Bd.2, S.491-493.

中でしかそれを語るができない。象徴的なのは、娘たちの結婚式であった。ゼッティもネッティも結婚式の招待客の中に、面識のある人物がほとんどいなかったのである。結婚式を民衆祭にするというマルティン・ザーランダーの考えは、斬新というよりもむしろ、この一家にも、そしてヴァイデリヒ家にも、そもそも友人というものがいなかったことに起因しているのである。マルティンにとって、唯一の独身時代からの友人が詐欺師ヴォールヴェントだったのであり、ほかに友人といえそうなのは、冒頭から登場するワイン通のメニー・ヴィークハルトであろうか。ヴィークハルトはいつも駅の周りをぶらついていて情報通であることは確かであるものの、誰とでも親しくする人物として描かれていることから、果たして本当に親友といえる人物なのかどうかは、はなはだ疑問である。かくして伝統的価値も隣人共同体も、時代病に対してはもはや無力なのである。

#### 4-2 一世代前の進歩主義・理想主義

いま一度マルティン・ザーランダーのことに立ち戻ってみよう。マルティンは進歩主義的な理想主義者を自認しているものの、実際のところはきわめて複雑である。公的領域における女性の参与には、保守的なマリー以上に消極的である。現在のマルティンは政治的には中道の立場をとっている。進歩主義者のかつての目標は達成されていた。「ほんの数年前にはまだ攻撃していた立場をとることになった」<sup>37</sup> のである。それでいて時代の変化を的確にとらえて、新しい時代の現実に適応できているわけでもない。だからこそ2度も3度も詐欺の被害に遭うのである。理想主義者としてはどうであろうか。マリーは豊かな家庭の娘だったのであり、マルティンのマリーとの結婚に持参金目当ての側面があった可能性を誰が否定し得ようか。教師に復職することが不可能でないにもかかわらず、妻と子供3人を経済的困窮の中でスイスに残して、10年もの歳月をブラジルで過ごし、事業で成功をおさめるというのは、実業家としての理想を追求したということではできるのかもしれないが、父親としての義務を放棄していると言わざるを得ない。マルティンは進歩主義者としても、理想主義者としても、矛盾をはらんだ不安定な存在である。自覚のないままに拝金主義という時代の病と隣り合わせになっているのである。

先述のように、経済的な成功が市民としての義務を負わせるものであることをマルティンは強く自覚し、民主政治に参加することを誇りにしているのであるが、これは裏を返せば、財産が市民としての自立や政治参加の前提条件と考えてしまっているとも言えるのではないだろうか。進歩主義と出世主義や拝金主義の距離は決して遠く隔たっているわけではないのである。ヴァイデリヒ一家やヴォールヴェントに対しても、マルティン・ザーランダーは妻マリーが抱いているほどの強い嫌悪感は覚えず、むしろある種の親近感すら覚えているように思われる。

---

<sup>37</sup> SW Bd.2, S.599.

### 4-3 アルノルトの世代

マルティンの息子アルノルトは既述のように聡明で慎重な若者として描かれている。ヴォールヴェントが義妹ミルハを用いた結婚詐欺という形でザーランダー家に対して三度目の損害をもたらそうと企み、マルティンがいとも簡単に罠にかかりそうになった時、ミルハの正体を即座に見破って、ザーランダー家を救ったのはアルノルトであった。またアルノルトは徹底した調査により、ヴォールヴェントの犯罪を暴き、ザーランダー家の被った損害を取り戻せる可能性が出てきたのであった。ザーランダー家にとっては救世主の役割をはたしているアルノルトだが、道徳的腐敗を克服する方向へと社会を導いていくことはできるのだろうか。

英国留学当時のアルノルト・ザーランダーは、学友の一人と故郷の政治に関する議論をし、その結論に関して、父親に宛てた書簡の中で次のように述べている。「僕たちが最終的にたどり着いた決心というのは、学生運動の扇動家たちとは反対に、新しい世代として出現するのではなく、むしろ黙って、ともどもに責任を持ち、うまい解決策を見つめる手助けをすることが必要となった時に、どんな場合に対しても役に立てるようにしよう、ということでした。一般的なことを共に考えることが、常に必要なのであって、共におしゃべりすることが必要なのではない、という結論に至ったのです。」<sup>38</sup> 学位を取得したのち、長い外国旅行で見聞を広めた後でようやく故郷に帰るのである。

ミュンスターブルクに帰ってきた後のアルノルトの考えも本質において変化していない。父親が薦める政治参加を頑として拒み、まずは時代の変化を理解することが必要だと考えるのである。父親のような政治家にはならず、ディレッタントの歴史学者であろうとする。混乱の外に身を置くことによってのみ、時代の現実の冷静かつ明晰な分析が可能なのであって、将来政治参加をすることがあるにしても、まずは現実を正確に認識し、確実な判断力を身に着けることができたらだというわけである。最終の第21章でアルノルトは8人の友人を自宅に招くことになる。この友人たちは全員さわやかで礼儀正しく、確かな知識と教養をそなえ、活発な精神の持ち主ばかりで、食卓での会話の中では政治のことも話題に上った。併しながら政治的野心を抱く者や一つの理念を強く主張し続ける者はおらず、政治参加に関しては、誰もが基本的にアルノルトと同じような考えの持ち主であった。この8人の食卓仲間はマルティンにとっても好感の持てる若者たちであった。現在は中道の政治家となっているマルティン・ザーランダーにとって、共感できる部分があるのは確かなのだろう。「これもまた教育の成果なのだ」と彼は言うが、「家庭のおかげなのか、あるいは国家のおかげなのか、ということ穿鑿はしなかった」<sup>39</sup> のである。すなわちこの若者たちは社会の現実を正しく認識し、洞察力を磨くことで、自分自身や家庭を守ることはできるであろうが、公共性の観点からすると、若い世代の

---

<sup>38</sup> SW Bd.2, S.571.

<sup>39</sup> SW Bd.2, S.693.

政治参加がなければ国家社会における民主主義の発展を継承していくことが困難となってしまうのである。教養の本質たる普遍的人間愛の精神を社会参加と結びつける公教育の必要性が説かれていると考えられる。

過去と現在から謙虚に学ぶアルノルトとその仲間の若者たちが、社会悪や時代病を国家社会の問題として克服することができるかどうかは、結局のところわからないままである。若い世代に期待がもてないわけではないというところでこの社会小説は終わっており、民主主義の成熟や社会の矛盾の解決までの道のりはまだ遠く、相当な時間を要するというのが、本作品を執筆した最晩年のケラーの認識なのである。家族を従えて大きな荷物とともにミュンスターブルク駅から超特急列車に乗った詐欺師ヴォールヴェントは、マリーとアルノルトのいるザーランダー家を標的にすることはもはやないと思われるものの、おそらくはまたいくつもの国を歩き来して、新たな標的を見出して、悪辣な詐欺行為を繰り返すのではないだろうか。

# Über Gottfried Kellers Roman *Martin Salander*

Eiichi TANIGUCHI

Gottfried Kellers Roman *Martin Salander* gibt ein Totalbild der damaligen gesellschaftlichen Wirklichkeit der fiktiven schweizerischen Stadt Münsterburg, die mit Zürich gleichgesetzt werden kann. Hier handelt es sich vor allem um das allgemeine Aufwärtsstreben und den moralischen Verfall der bürgerlichen Gesellschaft.

In dieser Abhandlung wird diese Problematik zuerst im Zusammenhang mit der Eisenbahn und den Eisenbahnanlagen als Symbol der Zeit, mit den Waldzerstörungen durch skrupellose Holzungen und mit den fortschrittlichen Erziehnngen des Hauses und des Staates analysiert. Der egoistische Karrierismus und der Mammonismus erweisen sich als Folge der Fortschrittsgedanken. Dann wird untersucht, ob es im Roman hoffnungsvoll ist, dass diese Zeitkrankheiten irgendwie geheilt werden können. Die junge Generation, die zum Bildungsbürgertum gehört und von Arnold, dem Sohn des Titelhelden, und seinen Freunden repräsentiert ist, kann zwar mit ihrer scharfen Einsicht und kritischen Urteilskraft ihre eigenen Familien vor den Wirtschaftskriminalitäten schützen, aber sie ist trotz ihrer klaren Erkenntnis noch lange nicht fähig, die Zeitkrankheiten der Gesellschaft zu heilen und die Demokratie weiter zu entwickeln. Die gebildete junge Generation verweigert nämlich zunächst jedes Engagement.